

子の神大黒天柴燈護摩と手賀沼の城郭跡巡り

集合時間場所：JR 北柏駅北口、AM 8:30 集合、柴燈護摩開始は午後 14:00 以降です、昼食必要。

松ヶ崎城 「手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会」

築城については 2 説有り『松戸の高城氏と関連した城』と『村人が自分たちのために築いた城』の説があります。

「高城氏」とは、1500 年代に勢力増大した小金井城主であり、松ヶ崎は支城であったのだろう。

「村人」の方の説明は意味がよくわからないが、これまで調べた限りでは、ここも根戸城も「匝瑳氏」の城であった。東葛地区の城郭の本にも、城主として匝瑳(そうさ)氏の名が記されている。

太田道灌の築城伝説がある。

匝瑳氏からは、戦国初期の 1456 年、古河公方(こがくぼう)と結託した馬加氏や原氏が千葉宗家を襲ったあげく、その遺児の千葉実胤(さねたか)自胤(よりたね)兄弟が市川城から武蔵に落ち延びた時「享徳(きょうとく、1454~1485)の大乱」武蔵千葉氏と馬加氏の戦いで名前が出て来る。

その後、武蔵に落ちた千葉自胤が、管領上杉氏やその家宰・太田道灌の助勢を得て戦った「※境根原合戦(1478)」、長尾景春の乱、江古田沼袋・境根原・臼井攻城戦(1476~1479)の時にも、上杉&太田道灌&千葉実胤・自胤兄弟の側について、討ち死した名前が出て来る。この時は家臣の野嶋氏今泉氏も戦死した。 「本土寺過去帖」より。

「松崎」という地名は、室町時代の応永 26 年(1419)には現れるという。

千葉県佐原にある香取神宮が仮殿を造営するにあたり、屋根葺き用の瓦木を運ぶことに触れた書状らしく、相馬松崎から材木と人手(造営もあるのかな、木の伐採と船の漕ぎ手の事を言っている気もする)について書いてある。

「松崎で松ノ木をとって運んだ時、船を漕ぐ人達が酒代を求めたので仕方なく酒を出した」とあります。

※ 境根原(さかいねはら)合戦、千葉家佐倉城主となった千葉考胤(ちばのりたね)



柏市酒井根には「合戦場」と称する箇所が多数あり、またかつては千、万ともいう数の塚があり、原、木内など千葉孝胤軍の将兵の墓であると伝えられていた。

光が丘の開発などでこれらの塚も埋められてしまったが、現在も団地の隙間など一部箇所に塚が残っている。

また、柏市中央図書館の正門前にある柏市の地図の中に、「境根原合戦古戦場」と書かれてある。

写真：境根原合戦場跡 (千葉県柏市光ヶ丘団地)

大堀川呼塚橋から手賀沼方面へ

呼塚の常夜燈

慶応元年(1865)9月に柏市呼塚を中心に柏市の松ヶ崎、松戸市の小金など 20 数カ村の人たちの浄財によって呼塚橋の袂に建立された。浄財寄付者のなかに、越中(富山県)高岡の人がいる。呼塚や手賀沼沿岸の村々を商圈とする売薬行商人であろう「越中富山のくすり売り」は全国 66 州を制していたという、お代は後払いの「先用後利」商法の元祖でもある。

昭和も戦後になり、国道 6 号拡張工事にともない、常夜燈は旧水戸街道脇にあった呼塚河岸から 300 メートル下流の慈恵医大病院に近い北柏橋際の公園に大師堂(四国 88 ヲ所、4 番大日寺写し)、地藏堂とともに移転された。藤ヶ谷なま街道の常夜灯、布施弁天富勢の常夜灯、呼塚河岸の常夜灯など柏市には他にも多くの常夜灯が残っています。



写真：大師堂は准東葛印旛大師(柏大師)第 4 番札所、発願は柏市長全寺です。

北柏駅南口の我孫子寄りから我孫子市根戸の山林へ入ると「根戸城址」であり、東側の根戸城址通りへ抜ける。根戸城址通りには「なにこれ珍百景」に登場しそうな、道路上に突出した林のヒサシが空の一部を隠している。この大ヒサシの向かい側の「ふれあい体験農園」の山裾から「はげの道」から外れ再び森林の船戸へと進む。

根戸城跡と金塚古墳、

根戸城址通りにある看板より抜粋

鎌倉時代、相馬胤村の三男胤光が根戸に城を構え、根戸城とし根戸三郎胤光と名乗ったといわれる。

根戸城跡がある付近は江戸時代に根戸村といわれた、後明治 22 年には合併して柏市富勢村になり、昭和 29 年には我孫子市と合併して、我孫子市根戸字荒追となって現在に至ります。

根戸城は戦略上防御の構築城として、遺構として曲輪、虎口、土塁、空堀、落とし穴等が発掘調査で多く見つかっていて、戦闘集団が居を構えていた様子ではないようだ。

説明看板では、確定的なことは城跡と思われる遺構があり、道路上に突出しているヒサシ部分の上には遺構の一部が乗っているということが記されている。

異説として、小田原城落城後、柏市高田に城があった匝瑳氏の支配下で、匝瑳氏は大田道灌の影響下にあったため、道灌堀という地名があることから大田道灌が築城したのではないかともいわれている。

また別説では、小田原北条家の家臣であり、手賀沼一体を領有していた高城氏の城ではないかとも言われる。

松ヶ崎城、布施城と並んで根戸城もただ遺構があるだけで、歴史的に定かでないことが多い。

金塚古墳(かなつかこふん)、直径 20m 主体部は盗掘と破壊されていたようです。木棺直葬(もっかんじきそう)破片や石枕(いしまくら)と立花(りっか)などの貴重な副葬品が出土されています。

写真 石枕



やがて「武者小路実篤邸」と「船戸の森」に入る。

旧武者小路実篤邸、

2011 年白樺文学館「白樺便り」より

武者小路実篤は 1916 年から 1918 年(大正 5~7 年)まで、この地に居住していました。「新しき村」や「AとB」などはここで書かれたものです。また、「新しき村」の発会式もこの邸内で開かれました。

1700 坪あるこの広大な屋敷のある場所は、我孫子市内でもまださほど開発が進んでいないところです。手賀沼側にはほとんど建物もなく、当時の面影を残しているといえるでしょう。なお、玄関前の案内板に「ロダンのブロンズ像を抱きしめ・・・」とある、案内板そのものも古いようなので交換して、その際誤説「ロダンのブロンズ」は訂正または削除願いたいのは誰も同じとおもう。

根戸船戸古墳、

我孫子市アビスパ資料より

全長 33m の前方後円墳の 1 号墳と全長 22m の前方後円墳の 2 号墳が残り、2 号墳の埋葬施設は横穴式石室である

旧水戸街道と日立精機 2 号古墳、

七世紀前半(600 年代)の前方後円墳で、旧日立精機我孫子工場の敷地内に 1 号古墳と共に在りました。横穴式の石室は既に荒らされ出土品は有りませんでした。現在「我孫子古墳公園」と呼ばれています。

古墳の前には「日立精機我孫子工場跡地」の碑が立っています。

常磐線を跨いで歩道橋が架かり、我孫子西小学校前の旧水戸街道を国道 6 号に繋げている、歩道橋が架かる以前は踏切で我孫子駅ホームは、この辺りが柏寄りの西端でした。日立精機正門もあり朝は混みました。

国鉄庚申碑、JR 常磐線我孫子駅南口交番の後方に高さ 2 m 程の庚申塔が立っています。

碑文には、明治 29 年常磐線土浦と東京田端間が開通したが、開講記念式典は行われなかった。

だが、取手駅では事故が起きないのに、我孫子駅構内では列車事故が頻発したため、殉職者の供養と無事故祈願を誦して大正 14 年に建てられた。庚申塔背面には「駅開講より 30 有余年、殉職、事故死で 20 余名、亡霊の供養と事故防止を祈願して・・・云々」と記述があります。

白山中学の北側から我孫子駅方面を目指します、旧水戸街道跨線橋や龍舌蘭(リュウゼツラン)の大樹があります。

我孫子駅の悲話

飯泉喜雄は、明治元年5月5日、相馬郡我孫子宿 2640 番地で出生する。父は飯泉其怨、代々名主であった。青年になるまでの名を「喜之助」といい、後に「喜雄」と呼んだ。

取手の染野勇三郎、島田重礼の下で漢学を学ぶ。

喜雄は、その生涯と財産の全てを我孫子駅の誘致に積極的に動いた。何といても鉄道を誘致することで、多大の恩恵を受けると確信し、誘致運動に専念した。

彼は、当時の役場（現我孫子寿保育園）から高野山にかけての広い土地をかなり所有していたが、その土地を当時町はずれだった現在の駅付近の土地と交換して、駐車場の用地を確保した。

自動車に対する人々の認識は「火の粉をまき散らす」という危険性に反対する人も多く、駅舎や鉄道の建設は困惑したが、民家のないところに目をつけた喜雄の計画は功をなし、自ら停車場予定地として準備した場所を鉄道用地とし、その土地を無償提供して誘致の陳情を行い、我孫子駅の設置は決定した。

喜雄はこうして、私財を投じて鉄道誘致につき込み、我孫子の発展に尽くした。

喜雄が八千代町長（現柏市）になったのは鉄道出願から二年後、工事着工から八ヶ月後の明治 28 年 7 月でした。

明治 34 年 12 月に再び町長に就任。町長時代から手がけていた駅前の整備に尽力、停車場道（駅前より成田街道との交差点）をつくり、駅及び道路に桜の木を植え、環境づくりに専念する。その記念碑が「停車場道碑」と「桜樹植付記念碑」なのです。現在、我孫子駅南口ロータリーの右側にある、花屋の前に置かれています。

喜雄は明治 39 年 9 月に、結核で 38 才で急逝した。だが、彼の死後、飯泉家の大悲劇は始まる。

四方八方から負債取り立てに人が集まり、残された家族も全然知らない借金の返済を迫る人達が、他人は勿論、近親者からもあらわれた。未亡人になった妻「まさ」は証文もないままの要求にも応じて、永年続いた飯泉家の財産は、またたく間に無くなってしまった。周囲の急変と気苦労が重なり、精神的にもまいってしまい、健康を害し、明治 43 年 6 月 13 日、41 才で亡くなった。

さらに、長男喜一郎は 24 才、次男喜輔幼少で、三男喜久雄も 19 才で死亡。喜雄の血を直接継いでいるものは今、誰一人いない。

我孫子市史研究第十号 より

第五十九番、自性山興陽寺、曹洞宗(もと葛飾郡金杉村高德寺末)

御本尊、薬師如来、移し寺、愛媛金光山国分寺、

ご詠歌、守護のためたててあがむる国分寺 いよいよめぐむ薬師なりけり

開山大涼玄樹和尚、開基山高八右衛門(檀家)、天正八年(1580)遷化による草創建立。

大師堂は安永四年(1775)に創設、流れ造りの向拝付きという古い形を留めた造りで残っています。

薬医門の脇に、不許竈酒入山門の石塔があります、

意味は・・・竈酒(くんしゅ、清浄な境内への立入り制限で臭者や飲酒者の意)は境内への入門を許可しない・・・という意味です。

拈華微笑(ねんげみしょう)、言葉を使わず、心から心へ伝えること。また、伝えることができること。

仏教語で「拈華」は花をひねる意。「華」は草木の花の総称。「拈」は指先でひねること。

拈華微笑の句例「拈華微笑の間柄」、

用例、心敬は「無師自悟」とか「頓悟直路(とんごじきろ)の法」とか、禅語をしきりに使っている。

そしてそれを追いつめてゆけば靈山の拈華微笑までゆくだろう。唐木順三「日本人の心の歴史」

類義語、以心伝心(いしんでんしん)、教外別伝(きょうげべつでん) 不立文字(ふりゅうもんじ)

【故事】 釈迦が靈鷲山(りょうじゅうせん)で弟子たちに仏法を説いたとき黙って大梵天王から受けた金波羅華(こんばらげ金色の蓮の花)をひねって見せると摩訶迦葉(まかかしょう)だけがその意味を悟って微笑んだので釈迦は彼だけに仏法の心理を授けたと言う故事による。

「拈華」は花をひねること。「花を捻りて微笑する」と訓読みする。

頓悟直路とは、「漸悟(ぜんご)」、漸修禪に対して、「頓悟」、頓悟禪の直路の法を説いたものです。

「頓悟」と「漸悟」の対立は、六祖慧能(えのう)の流れをくむ南宗禪(日本に入ったのはこの系統)が、北宗禪を「漸悟」だと批判したことで注目されるようになったらしい。

禪宗には、十牛図(じゅうぎゅうず)、禪の悟りにいたる道筋を牛を主題とした十枚の絵で表したものがあつた。十牛禪図(じゅうぎゅうぜんず)ともいふ。

中国宋代の禪僧、廓庵(かくあん)によるものが有名であり、以下の十枚の図からなる。

ここで牛は人の心の象徴とされる。またあるいは、牛を悟り、童子を修行者と見立てている。

一、尋牛(じんぎゅう) 牛を捜そうと志すこと。悟りを探すがどこに在るかわからず途方にくれた姿を表す。

二、見跡(けんせき) 牛の足跡を見出すこと。足跡とは経典や古人の公案の類を意味する。

三、見牛(けんぎゅう) 牛の姿をかいまみること。優れた師に出会「悟り」が少しばかり見えた状態。

四、得牛(とくぎゅう) 力づくで牛をつかまえること。何とか悟りの実態を得たものの、いまだ自分のものになつていない姿。

五、牧牛(ぼくぎゅう) 牛をてなづけること。悟りを自分のものにするための修行を表す。

六、騎牛帰家(きぎゅうきか)・牛の背に乗り家へむかうこと。悟りがようやく得られて世間に戻る姿。上図参照

七、忘牛存人(ぼうぎゅうぞんにん) 家にもどり牛のことも忘れること。悟りは逃げたのではなく修行者の中にあることに気づく。

八、人牛俱忘(にんぎゅうくぼう) すべてが忘れられ、無に帰一すること。悟りを得た修行者も特別な存在ではなく本来の自然な姿に気づく。

九、返本還源(へんぼんげんげん) 原初の自然の美しさがあらわれてくること。悟りとはこのような自然の中にあることを表す。

十、入廬垂手(にっつんすいしゅ) まちへ．．． 悟りを得た修行者(童子から布袋和尚の姿になつている)が街へ出て別の童子と遊ぶ姿を描き、人を導くことを表す。

卷子、画帖など、また掛幅1幅に10描いたものもある。頌を加えたものは少なく、ほとんどが絵のみで、文字をまじえない。中国伝来のものもあるが、日本の室町時代以後の禪僧、また絵画の各派の画人によって制作されたものが多い。 Wikipedia



第四十二番、真言宗豊山派大光寺、御本尊、不動明王、移し寺、愛媛県一果山佛木寺

ご詠歌、草も木も仏になれる仏木寺 なおたのもしき鬼畜にんてん

開山開基は不詳ですが本土寺過去帳に「延寿二年(1490)」の記録が有り、創建は室町時代だったようです。

我孫子宿の中心にあつたため宿場の発展と共に栄えましたが文化二年(1805)と文政三年(1820)の両大火で罹災し建造物古文書をすべて焼失してしまいました。

本堂は仮堂のままでしたが、聖天堂は文化七年(1810)に再建され、その後、嘉永四年(1851)に高野山から夢告大師像を迎え、安政三年(1856)には「御衣、御袈裟、御念珠の三品」が授与され厄除け大師としての信仰参詣が広まりました。

須弥壇中央の夢告大師像の両脇には此岸(現世)で極楽往生を説く釈迦と観音、彼岸(来世)で往生した者を迎える阿弥陀と勢至が向き合う遣迎二尊像として珍しい配置で祀られています。

手賀沼公園、(昼食) 12:50 はけの道から「北の鎌倉」文化人の居住した足跡を辿りながら、子の神大黒天へ。

第三十八番、子の神大黒天、御本尊、子の神(ねのかみ)大將軍、移し寺、高知県蹉蛇山金剛福寺

ご詠歌、ふだらくやここは岬の船のさお とるも捨つるも法のさだ山

縁起では子之神将は、行基菩薩が諸国巡錫の折りに下総国国分寺で薬師如来と十二神将および大黒天を刻んで安置したが、国分寺がたびたび火災の災厄に逢うので、尊像を背負って諸国を遊歴した宥啓阿闍梨により、康保元年（964）此の地に一字を造り安置されたと云います。

子の神大黒天は、腰下の疾患に靈験があるといわれています。

子の神は山の神と同じく山頂にあることが多い、この信仰は山の尾根を歩いて行かねばならず、足腰が強くないとならず里に戻った時には「わらじ」を奉納した。今はブリキのワラジが奉納されています。

【子の神】薬師如来とその信者の警護をする十二人の大将を十二神将といいますが、子の神は毘羯羅大将(ひがらだいしょう)、十二支の子を指します。

【大黒天】魔訶伽羅天(まかからてん)はインドでは強暴な戦闘神でしたが、(三面六肘(又は八肘)で鎧を付け武器を持つ仁王のような姿です)、中国に伝わると、厨房(台所)が潤うことで財を益す繁盛神となり、日本では福袋や打出の小槌を持ち米俵を台座にした、ふくよかな神に変身しました。

神仏一体の寺社で、大国主と大黒は習合し更に子の神も習合し鼠をその使いとして現在に及んでいます。

【逸話】源頼朝が旗揚げ目指し関東諸国を歩いていた折、我孫子の里で重い脚の病にかかり歩行困難となった為、沼近くの農家に身を寄せ数日過ごしたある夜、夢枕に大きな白ネズミに乗った白髪の老人が柊(ヒイラギ)の葉を持って現れました。そして、この地の鎮守子の神権現の化身であることを告げ、老人は柊の葉で頼朝の足を示し祓(はらう)ったという。後日、頼朝は將軍となり社殿を造営しました。

第四十三番、寿の白花山延寿院、真言宗豊山派(もと大勝院末) 大正七年ここへ移転した。

御本尊、不動明王、移し寺、愛媛県源光山明石寺

ご詠歌、聞くならく千手ふしぎのちからには 大ばんじやくもかろくあげ石

古くから、子の神大将の別当寺であったといわれてきました。

延寿院は、JR 我孫子駅の北側にあり大師道があった頃は、久寺家の宝蔵寺から相馬霊場の南端に位置する興陽寺の途中に位置していました。明治 29 年、常磐線の開通時に大師道は線路によって分断され、大正七年(1918)には、駅舎の手賀沼側が栄えたことにより、宿坊として子の神に移ったといわれております。

柴燈護摩火渡りの祭事

柴燈護摩火渡り荒行は、古くから修験道(山伏)に伝わる秘法で行者は各家各位の祈願を祈念した護摩札を奉持して火の中に入り「不動の三昧(さんまい、精神集中が深まりきった状態)に住しつつ信心各位の願いを祈ります。

当山におきましても江戸時代より続く伝統的な行事です。

「火生三昧」とは不動明王が護摩の火の中に住するという意味で、「火渡り」とは、柴燈大護摩供を厳修した後、その護摩のおき火(炭火)を整備して、その上を歩いて渡るといことです。

この護摩の火(不動明王の智慧の火)で、我々のけがれ、心の迷いや煩惱を焼き清めて、ご加護をいただくのです。柴燈大護摩供大祭りを厳修致しまして、皆様の願いを御祈禱致します。

右写真 2009/10 相馬霊場秋のコースに於ける参加者の火渡り



祭典は 16:00 頃まで続けられるため、火渡りの祭事が始まる前に解散とします。

JR 我孫子駅までの帰路地図



地図中の「延壽院」が「子の神大黒天」柴燈護摩会場です、赤い線上の道を 1600m 約 20 分です。



我孫子ゆかりの人々

白樺文学館資料

岡田 武松 Okada, Takematsu (1874～1956) 気象学者。
布佐に生まれる。日本の気象観測事業の確立に貢献した気象学界のパイオニアである。

加瀬 完 Kase, Kan (1910～1995) 教育者。政治家。
昭和 13 年我孫子第二小学校校長就任。以後市内小中学校校長を歴任。
後に参議院議員となり、教育の充実に尽力する。

嘉納 治五郎 Kano, Jigoro (1860～1938) 柔道家。教育家。
天神山に別荘を建てる。講道館を創設し、柔道の発展に貢献する。

坂西 志保 Sakanishi, Shiho (1896～1976) 評論家。
杉村楚人冠邸内に一時期過ごす。終戦後。国家公安委員、放送番組向上委員長を務める。

志賀 直哉 Shiga, Naoya (1883～1971) 作家。
大正 4 年から 12 年までに弁天山在住。雑誌「白樺」の創刊に参加。「小説の神様」とも称される。

杉村 楚人冠 Sugimura, Sojinkan (1872～1945) ジャーナリスト。
大正 13 年から我孫子に永住。随筆「湖畔吟」などで、手賀沼周辺を全国に紹介。
俳句結社湖畔吟社を作るなど、地元の文化向上に努めた。

滝井 孝作 Takii, Kosaku (1894～1984) 作家。
志賀直哉にすすめられ大正 11 年から 12 年にかけて我孫子に移り住む。この間に代表作「無限抱擁」を執筆。

田口 静 Taguchi, Shizuka (1907～1977) 医師。
湖北に生まれる。当時無医村だったこの地区に医院を開業。地域住民に「赤ひげ先生」と慕われ、献身的な医療活動を行なった。

血脇 守之助 Chiwaki, Morinosuke (1870～1947) 歯科医師。
我孫子に生まれる。日本の歯科医学の発展に貢献し、後進を育てた。野口英世もその門弟のひとり。

中 勘助 Naka, Kansuke (1885～1965) 作家。
大正 9 年から 11 年まで白山在住。幼年時代の思い出をもとにした「銀の匙」で世に認められる。

中野 治房 Nakano, Harufusa (1883～1973) 植物学者。
中里に生まれる。手賀沼も含めた湖沼の植物研究から出発し、幅広い研究活動を展開。
大正 9 年に「湖北村誌」を発刊。

バーナード・リーチ Bernard, Leach (1887～1979) イギリスの著名な陶芸家。
柳宗悦らの民芸運動に参加。我孫子の柳邸に窯を開き、作陶に励んだ。



明治 41 年頃ロンドンに於いて、当時画家の高村光太郎と親交があり、翌年再来日時に父高村光雲と岩村透教授に手紙を託している。

武者小路 実篤 Mushanokoji, Saneatsu (1885~1976) 作家。

大正 5 年から 7 年まで根戸在住。雑誌「白樺」の創刊。白樺派の代表的存在となる。

柳 宗悦 Yanagi, Muneyosi (1889~1961) 民芸研究家。

大正 3 年から 10 年まで天神山在住。雑誌「白樺」の創刊に参加。日本民芸運動の創始者。日本民藝館設立。

柳 兼子 Yanagi, Kaneko (1892~1984) 声楽家。

大正 3 年柳宗悦と結婚し 10 年まで我孫子に住む。晩年まで声楽の教師を務める傍ら、数々の独唱会・演奏会を開き、海外でも絶賛を博した。その歌声は「日本の声楽の母」と称えられている。

柳田 国男 Yanagita, Kunio (1876~1962) 民俗学者。

布佐に実家の松岡家があり、青少年時代によくこの地を訪れた。日本民俗学の創始者。

山下 清 Yamashita, Kiyoshi (1922~1971) 画家。

前頁写真参照(駅弁の包装紙)

昭和 16 年頃から昭和 21 年頃まで、駅弁屋「弥生軒」のもとに身を寄せ、雑用に従事しながら暮らしていた。色鮮やかな貼り絵で有名。放浪の画家と呼ばれる。弥生軒は立食そばとして常磐線ホームにある。

我孫子市中心部の案内図、

2010/10 アビスパ無料パンフより



新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会、参考資料